

【研究ノート】

海外勤務者の母国とホスト国に対する
態度変容とその影響要因小島 奈々恵¹⁾*, 深田 博己²⁾

1) 東北大学高度教養教育・学生支援機構

2) 広島文教女子大学

諸外国での勤務経験をもつ日本人海外勤務者85名を対象に、出国前、海外滞在中、帰国後の3時点に関して、母国およびホスト国（移住先）に対する態度（行動意思）とその理由についてWeb調査を実施した。海外勤務者の各国に対する態度の変遷を明らかにするとともに、母国に対する態度とホスト国に対する態度を組み合わせることで態度類型を決定し、その変遷についても明らかにした。海外勤務者の国に対する態度は、移住プロセスを通して変化することが確認された。また、生活に対する満足感が母国とホスト国の両方に対する態度の決定に、海外勤務に対する満足感や自己の目的を達成させることが特にホスト国に対する態度の決定に重要な役割を担っていた。さらに、最も望ましいと考えられる“両国肯定群”に至るまでの過程で、“母国肯定・ホスト国否定群”を経る海外勤務者が多くみられた。

1. 問題

1.1 日本人異文化接触者3タイプ

昨今では、海外へ出かける日本人は多く、その形態は様々である。その中でも、滞在期間に差はないものの、移住動機に違いがある移住者として、留学生、海外勤務者、帰国子女の3タイプが存在する。斎藤(1988)によると、留学生は自発的な・満足した動機で移住し、帰国子女は強制された・不本意な動機で移住し、その中間に位置するのが海外勤務者である。

移住先を自発的に選択することができる留学生の国に対する態度やその規定因について検討することで、留学生が移住する可能性や、移住先に求める事柄を明らかにすることができる。すなわち、留学先に対して肯定的態度を示せば、留学する可能性が高まり、否定的態度を示せば、留学する可能性が低まると考えられる。小島・深田(2010)によると、留学生の母国およびホスト国（移住先）に対する態度は、留学プロセス、つまり、留学前－留学中－留学後の3時点を通して変化し、その決定には国・国民に対する肯定的感情と生活に対する満足感が重要な役割を担っていた。海外勤務者についても、同様の検討をすることで、海外勤務者が移住先に求める事柄について明らかにすることができ、派遣先や派遣期間を決定する企業に役立つ基礎

的知見を得ることができる。

なお、小島・深田(2011)は、帰国子女の国に対する態度やその規定因についても検討している。帰国子女の態度も移住プロセスを通して変化しており、国に対する肯定的感情と否定的感情、生活に対する満足感と不安が国に対する態度を決定する重要な役割を担っていた。海外勤務者は、留学生と違って滞在先や滞在期間を選択できないため、また帰国子女と違って目的を持って移住するため、海外勤務者の態度の変容とその規定因は、学生である留学生や帰国子女と異なることが推測される。

1.2 海外勤務者の態度研究

海外勤務者を対象とした研究の多くは、海外勤務者の適応や海外勤務者の職務遂行能力を検討しており(e.g. Selmer 2001, 2004, 2005, 2006)、海外勤務者の母国およびホスト国に対する態度を検討した研究はほとんどない。そして、海外勤務者の態度を検討した数少ない先行研究のほとんどが、ホスト国滞在中の母国への帰国意思もしくはホスト国残留意思と適応との関連性を検討している。

すなわち、Takeuchi, Yun, & Russell (2002) は、ホスト国文化の知識、言語能力、コミュニケーション

*）連絡先：〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構 nanae.kojima.e5@tohoku.ac.jp

意思に規定される適応が、早期帰国意思に負に影響することを示した。また、Takeuchi, Yun, & Tesluk (2002) は、適応が満足感を媒介して早期帰国意思に負に影響することを示し、Wang & Takeuchi (2007) も、一般適応が早期帰国意思に負に影響することを示した。

さらに、配偶者の適応について検討したBlack & Stephens (1989) は、ホスト国残留意思が配偶者の適応（一般、交流）や海外勤務者の適応（一般、交流）と正の相関関係にあることを示した。

以上のように、海外勤務者の態度に関する先行研究では、ホスト国滞在中の母国への帰国意思もしくはホスト国への残留意思と適応との関連性が検討されている。母国を中心に、海外勤務者が国際人として活躍してくれることを期待するのであれば、海外勤務者の母国に対する態度も、ホスト国に対する態度も、共に重要であることは言うまでもないことである。しかし、出国前・滞在中・帰国後の各時点における母国およびホスト国に対する海外勤務者の態度が比較可能な形で検討されることはなかった。

1.3 本研究の目的

小島・深田 (2010, 2011) を参考に、海外勤務者の母国およびホスト国に対する態度を検討する。異文化間移動する対象について検討する際、そのプロセスに注目することは重要である。留学生研究でもその重要性は指摘されており (Herman & Schild 1960; Martin 1984)、海外勤務者研究においても同様のことが言える。海外勤務者の国に対する態度についても、出国前から帰国後までのプロセスに沿って時系列的に捉える。その際、認知、感情、行動の3種類ある態度成分 (Rosenberg & Hovland 1960) のうち、海外勤務者が実際にとる行動に最も近い行動的態度 (行動意思) に注目し、母国への帰国意思やホスト国への在留意思などの行動意思を測定する。国に対する肯定的イメージ (認知的態度) や、肯定的感情 (感情的態度) を海外勤務者が抱いていたとしても、実際に行動しなければ、母国を中心とした海外勤務者の活躍は期待できないからである。

さらに、海外勤務者の国に対する態度の説明理由についても検討する。小島・深田 (2010) に倣い、海外

勤務者の母国に対する態度およびホスト国に対する態度を組み合わせ、両国に対する態度の類型を決定し、出国前、海外滞在中、帰国後の3時期それぞれについて、類型別に態度の説明理由を明らかにする。

2. 方法

2.1 調査対象者

海外勤務経験者104名 (男性80名, 女性24名) の調査対象者より、海外滞在期間が2年未満であった19名を除外した85名 (男性66名, 女性19名; 平均年齢43.24歳, $SD = 9.92$) を分析対象者とした。アメリカ・カナダ (30名), 中国 (19名), ヨーロッパ (14名), 韓国 (9名), アジア (中国, 韓国, 台湾を除く) (8名), 台湾 (2名), ロシア (2名), オーストラリア (1名) での勤務経験者で、平均滞在期間は50.48カ月 ($SD = 37.57$) であった。また、出国時の平均年齢は30.25歳 ($SD = 6.73$), 帰国時の平均年齢は34.40歳 ($SD = 7.21$) だった。

なお、本研究で報告するデータは、諸外国で勤務していた海外勤務経験者を対象とした調査研究の一環として収集されたものであり、小島・深田 (2018) の調査と同時に収集したものである。

2.2 調査手続き

調査会社に依頼し、出国前、海外滞在中、帰国後の3時期について、回想法を用いた1回のWeb調査を実施した。対象者が日本を母国とする海外勤務経験者であることを確認するために、6つのスクリーニング項目を設け、それらの条件を満たした対象者のみがアンケートに回答した。①あなたは日本人ですか (日本国籍を有していますか)。②現在、日本で働いていますか。③日本企業 (日系企業) に勤めていますか。④2年以上の海外勤務経験がありますか。⑤海外勤務された事があるのは1カ国のみですか。⑥海外勤務経験以前に、日本での勤務経験はありますか。

2.3 調査項目

小島・深田 (2010, 2011) の日本人留学生および帰国子女を対象とした研究の枠組みを踏襲しているため、小島・深田 (2010, 2011) が用いた調査項目を一

部修正して利用した。具体的には、海外勤務者に適した表現になるように修正を加え、1回の調査で出国前、海外滞在中、帰国後の各時期における母国およびホスト国に対する態度を以下の質問と回答方法によって測定した。

なお、人口統計学的変数に関する項目など、他の項目も質問紙には含まれていたが、今回の分析には使用しなかったため、詳細を省略する。

2.3.1 出国前の態度

母国への残留行動意思：日本出国前（海外勤務地へ向かう前の日本では）、あなたは日本に残りたかったですか。「残りたかった」（5点）から「残りたくなかった」（1点）までの5段階で評定させ、その理由について自由記述で回答を求めた。

ホスト国への出国行動意思：日本出国前（海外勤務地へ向かう前の日本では）、あなたは外国（海外勤務地）に行きたかったですか。「行きたかった」（5点）から「行きたくなかった」（1点）までの5段階で評定させ、その理由について自由記述で回答を求めた。

2.3.2 海外滞在中の態度

母国への帰国行動意思：海外滞在中（日本への帰国が決定したとき）、あなたは日本に帰りたかったですか。「帰りたかった」（5点）から「帰りたくなかった」（1点）までの5段階で評定させ、その理由について自由記述で回答を求めた。

ホスト国への残留行動意思：海外滞在中（日本への帰国が決定したとき）、あなたは外国（海外勤務地）に残りたかったですか。「残りたかった」（5点）から「残りたくなかった」（1点）までの5段階で評定させ、その理由について自由記述で回答を求めた。

2.3.3 帰国後の態度

母国への残留行動意思：日本帰国後、あなたはそのまま日本に残りたいですか。「残りたい」（5点）から「残りたくない」（1点）までの5段階で評定させ、その理由について自由記述で回答を求めた。

ホスト国への再出国行動意思：日本帰国後、あなたは外国に行きたいですか。「行きたい」（5点）から「行きたくない」（1点）までの5段階で評定させ、その理由について自由記述で回答を求めた。

2.4 態度類型に関する分析手続き

小島・深田（2010, 2011）に倣い、母国とホスト国の両国に対する態度の組み合わせによって、海外勤務者の態度を類型化した。具体的には、母国に対する態度の高群（5点と4点）とホスト国に対する態度の高群（5点と4点）を“両国肯定群”，母国に対する態度の高群（5点と4点）とホスト国に対する態度の低群（2点と1点）を“母国肯定・ホスト国否定群”，母国に対する態度の低群（2点と1点）とホスト国に対する態度の高群（5点と4点）を“ホスト国肯定・母国否定群”，母国に対する態度の低群（2点と1点）とホスト国に対する態度の低群（2点と1点）を“両国否定群”，その他の組み合わせを“その他群”とした。

なお、母国あるいはホスト国に対する態度の中群を態度類型の分析に持ち込むと、母国あるいはホスト国に対する態度類型に、“母国中立・ホスト国肯定群”，“母国中立・ホスト国否定群”，“母国肯定・ホスト国中立群”，“母国否定・ホスト国中立群”，“母国中立・ホスト国中立群”の5類型が加わるため、態度類型は9類型に増加する。その結果、3時期間の態度類型の変遷パターンは、 9^3 の729パターンとなり、あまりにも煩雑になるため、本研究では便宜的に、母国とホスト国の少なくともいずれか一方に対して中立的態度（3点）を示す対象者を一括して“その他群”とした。この処理により、母国あるいはホスト国に対して明確な態度（肯定的態度あるいは否定的態度）を持つ対象者を抽出し、そうした明確な態度の理由を探り、態度類型の典型的な変遷を検討することが可能となる。

3. 結果

3.1 母国およびホスト国に対する態度とその変遷の一般的傾向

母国およびホスト国に対する態度の平均値、標準偏差、分散分析と多重比較の結果を表1に示した。海外滞在中のホスト国に対する態度以外の得点は、中点である3.00点を上回っていた。1要因3水準の分散分析（ $df = 2, 168$ ）の結果、母国に対する態度も、ホスト国に対する態度も、共に時期間で有意差を示した。有意水準を5%に設定した多重比較の結果、母国に対する態度得点は、出国前と滞在中に比べ帰国後のほうが

高く、ホスト国に対する態度得点は、出国前と帰国後に比べ滞在中のほうが低かった。なお、母国に対する態度に関しては、出国前と滞在中の態度得点に差は認められず、ホスト国に対する態度に関しては、出国前と帰国後の態度得点にも差は認められなかった。

3.2 態度類型とその変遷の一般的傾向

各時期の態度類型の出現比率と人数を表2に示した。3時期を通して、“その他群”が最も多かった。“その他群”以外の4群では、出国前では“ホスト国肯定・母国否定群”が24.7%と多く、滞在中では“母国肯定・ホスト国否定群”が34.1%と多く、帰国後は“両国肯定群”が22.4%と多かった。その中でも、“両国肯定群”は、出国前と滞在中に比べると、帰国後には2倍以上に増加していた。

3.3 態度類型別・時期別の態度の規定因

両国肯定、母国肯定・ホスト国否定、ホスト国肯定・母国否定、両国否定の4群に着目し、海外勤務者の母国およびホスト国に対する態度の説明理由を整理した(表3, 表4)。具体的には、心理学を専門とする研究者2名が別々に、小島・深田(2010, 2011)の母国とホスト国に対する留学生と帰国子女の態度の理由の分

類基準を参考に、海外勤務者である調査対象者から得た各国に対する態度の理由を分類し(一致率92.4%)、一致しなかった説明理由については、話し合いによってカテゴリーを決定した。

母国あるいはホスト国のどちらに対しても明確な態度(肯定的態度あるいは否定的態度)を持つ4群を分析対象とすることによって、肯定的態度と否定的態度の理由を効率的に検討することが可能になるため、態度の理由の分析の対象から“その他群”を外した。

“両国肯定群”は、母国に対する態度の説明理由として、母国での生活に対する満足感、家族事情などを、また、ホスト国に対する態度の説明理由として、ホスト国で自己の目的を達成させること、ホスト国に対する肯定的感情、ホスト国での生活に対する満足感などを挙げた。

“母国肯定・ホスト国否定群”は、母国に対する態度の説明理由として、母国に対する肯定的感情、家族と一緒にいたかったことなどを、また、ホスト国に対する態度の説明理由として、ホスト国での生活に対する不安や不満、母国に対する肯定的感情などを挙げた。

“ホスト国肯定・母国否定群”は、母国に対する態度の説明理由として、ホスト国で自己の目的を達成させること、ホスト国での生活に対する期待や満足感、

表1 母国とホスト国に対する態度の平均値, 標準偏差, および分散分析と多重比較の結果

	出国前	滞在中	帰国後	F 値	多重比較
母国に対する態度	3.05 (1.13)	3.29 (1.31)	3.65 (1.25)	10.83 ***	出国前 < 帰国後, 滞在中 < 帰国後
ホスト国に対する態度	3.65 (1.24)	2.89 (1.28)	3.68 (1.11)	22.65 ***	出国前 > 滞在中, 帰国後 > 滞在中

注1 表内の数値は平均値, ()内は標準偏差

注2 $df = 2, 168$

注3 多重比較は5%水準

注4 *** $p < .001$

表2 各時期の態度類型の比率 (人数)

態度類型	出国前	滞在中	帰国後
両国肯定	9.4 (8)	4.7 (4)	22.4 (19)
母国肯定・ホスト国否定	18.8 (16)	34.1 (29)	15.3 (13)
ホスト国肯定・母国否定	24.7 (21)	23.5 (20)	16.5 (14)
両国否定	2.4 (2)	3.5 (3)	0.0 (0)
その他	44.7 (38)	34.1 (29)	45.9 (39)

表3 母国に対する態度の理由

態度類型	出国前		滞在中		帰国後	
	カテゴリー	人数	カテゴリー	人数	カテゴリー	人数
両国肯定	母国での生活に対する満足感	2	母国で自己の目的を達成させるため	1	母国での生活に対する満足感	5
	ホスト国での生活に対する不安	2	家族事情	1	エスニシティ	3
	母国での仕事に対する満足感	1	ホスト国での生活に対する慣れ	1	家族事情	2
	母国と離れる寂しさ	1	その他	1	ホスト国での生活に対する不満	2
	海外勤務に対する前向きな気持ち	1			母国に対する肯定的感情	1
	異文化との触れ合い	1			母国での生活に対する慣れ	1
	不安	1			母国民との触れ合い	1
	その他	1			母国での仕事に対する満足感	1
					海外勤務に対する前向きな気持ち	1
					出国に対する後向きな気持ち	1
					期間の限定性	1
					決定事項であるため	1
					その他	1
					理由なし	1
母国肯定・ホスト国否定	ホスト国での生活に対する不安	5	母国に対する肯定的感情	7	母国での生活に対する満足感	3
	家族と一緒にいたかった	3	帰国に対する前向きな気持ち	4	家族と一緒にいたかった	3
	母国民と離れる寂しさ	2	ホスト国での生活に対する不満	4	母国に対する肯定的感情	1
	海外勤務に対する不安	2	家族と一緒にいたかった	3	母国での生活に対する慣れ	1
	母国に対する肯定的感情	1	母国民との触れ合い	2	母国で自己の目的を達成させるため	1
	母国での生活に対する満足感	1	母国文化との触れ合い	2	エスニシティ	1
	出国に対する後向きな気持ち	1	ホスト国に対する否定的感情	2	ホスト国での生活に対する不満	1
	ホスト国に対する肯定的感情	1	家族事情	2	家族事情	1
	決定事項	1	期間の適切性	2	その他	1
	その他	2	母国で自己の目的を達成させるため	1		
			不安	1		
	ホスト国で自己の目的を達成させるため (仕事系1)	7	ホスト国での生活に対する満足感	6	母国での生活に対する不満	3
	海外勤務に対する前向きな気持ち	4	海外勤務に対する満足感	3	ホスト国で自己の目的を達成させるため (仕事系2)	3
	出国に対する前向きな気持ち	3	ホスト国で自己の目的を達成させるため	3	出国に対する前向きな気持ち	3
ホスト国肯定・母国否定	ホスト国での生活に対する期待	2	ホスト国在留に対する前向きな気持ち	3	ホスト国での生活に対する満足感	2
	海外勤務に対する期待	2	ホスト国での生活に対する慣れ	2	異文化との触れ合い	1
	母国に対する肯定的感情	1	期間の不適切性	2	海外勤務に対する満足感	1
	ホスト国での自己の内的成長に対する期待	1	帰国に対する前向きな気持ち	1	海外勤務に対する前向きな気持ち	1
	母国での生活に対する不満	1	母国に対する否定的感情	1		
	家族事情	1	異文化との触れ合い	1		
	理由なし	1	ホスト国での生活に対する不満	1		
両国否定	母国での生活に対する不満	1	ホスト国での生活に対する満足感	1		
	出国に対する前向きな気持ち	1	海外勤務に対する満足感	1		
	不安	1	ホスト国で自己の目的を達成させるため (仕事系1)	1		
			ホスト国での生活に対する不満	1	家族事情	1

表4 ホスト国に対する態度の理由

態度類型	出国前		滞在中		帰国後	
	カテゴリー	人数	カテゴリー	人数	カテゴリー	人数
両国肯定	ホスト国で自己の目的を達成させるため (仕事系1)	3	ホスト国での生活に対する満足感	1	出国に対する前向きな気持ち (旅行2)	4
	ホスト国に対する肯定的感情	1	ホスト国での生活に対する慣れ	1	期間の限定性	4
	ホスト国での生活に対する期待	1	母国で自己の目的を達成させるため (仕事系1)	1	ホスト国に対する肯定的感情	2
	海外勤務に対する前向きな気持ち	1	帰国に対する後向きな気持ち	1	ホスト国での生活に対する満足感	2
	ホスト国での自己の内的成長に対する期待	1	その他	2	決定事項であるため	2
	異文化適応に対する自信	1			ホスト国民との触れ合い	1
	その他	1			ホスト国で自己の目的を達成させるため	1
					ホスト国での生活に対する不満	1
母国肯定・ホスト国否定			その他		その他	2
	ホスト国で自己の目的を達成させるため (仕事系1)	7	ホスト国での生活に対する不満	6	理由なし	1
	母国に対する肯定的感情	2	母国に対する肯定的感情	5	出国に対する後向きな気持ち (勤務1)	3
	海外勤務に対する不安	2	帰国に対する前向きな気持ち	5	家族と一緒にいたかった	2
	ホスト国に対する肯定的感情	1	家族と一緒にいたかった	3	家族事情	2
	ホスト国に対する否定的感情	1	母国文化との触れ合い	2	ホスト国での生活に対する不安	1
	出国に対する後向きな気持ち	1	期間の適切性	2	母国に対する肯定的感情	1
	家族と一緒にいたかった	1	ホスト国に対する否定的感情	1	母国と離れる寂しさ	1
	不安	1	ホスト国在留に対する後向きな気持ち	1	母国で自己の目的を達成させるため	1
	決定事項	1	母国での生活に対する満足感	1	母国在留に対する前向きな気持ち	1
			母国での生活に対する期待	1	その他	2
			母国民との触れ合い	1		
			母国で自己の目的を達成させるため (仕事系1)	1		
			時期の適切性	1		
ホスト国肯定・母国否定			不安	1		
	ホスト国で自己の目的を達成させるため (仕事系4)	11	ホスト国での生活に対する満足感	8	ホスト国での生活に対する満足感	5
	出国に対する前向きな気持ち	3	ホスト国で自己の目的を達成させるため	4	ホスト国で自己の目的を達成させるため (仕事系1)	3
	異文化適応に対する自信	2	海外勤務に対する満足感	3	ホスト国での生活に対する期待	2
	海外勤務に対する前向きな気持ち	2	ホスト国での生活に対する期待	1	ホスト国に対する肯定的感情	1
	ホスト国での生活に対する期待	1	ホスト国での生活に対する不満	1	ホスト国での自己の内的成長に対する期待	1
	異文化との触れ合い	1	ホスト国民と離れる寂しさ	1	出国に対する前向きな気持ち	1
	ホスト国での自己の内的成長に対する期待	1	ホスト国在留に対する前向きな気持ち	1	ホスト国での生活に対する不満	1
	母国での生活に対する不満	1	帰国に対する後向きな気持ち	1		
	その他	1	母国に対する否定的感情	1		
両国否定	家族と一緒にいたかった	1	海外勤務に対する満足感	2		
	ホスト国での生活に対する不安	1	海外勤務に対する不満	1		
	不安	1				

表5 態度類型の個人内変容

ID	出国前	滞在中	帰国後	ID	出国前	滞在中	帰国後
1	A	A	A	44	C	E	E
2	A	B	E	45	C	E	E
3	A	C	C	46	D	B	A
4	A	C	C	47	D	B	B
5	A	D	E	48	E	B	A
6	A	E	E	49	E	B	A
7	A	E	E	50	E	B	B
8	A	E	E	51	E	B	B
9	B	A	E	52	E	B	B
10	B	B	A	53	E	B	B
11	B	B	A	54	E	B	E
12	B	B	A	55	E	B	E
13	B	B	A	56	E	B	E
14	B	B	A	57	E	C	A
15	B	B	A	58	E	C	A
16	B	B	B	59	E	C	C
17	B	B	B	60	E	C	C
18	B	B	B	61	E	C	C
19	B	B	B	62	E	C	C
20	B	B	B	63	E	C	E
21	B	B	E	64	E	C	E
22	B	B	E	65	E	C	E
23	B	B	E	66	E	C	E
24	B	E	E	67	E	C	E
25	C	A	B	68	E	E	A
26	C	A	E	69	E	E	A
27	C	B	A	70	E	E	A
28	C	B	B	71	E	E	A
29	C	B	E	72	E	E	B
30	C	C	C	73	E	E	C
31	C	C	C	74	E	E	E
32	C	C	C	75	E	E	E
33	C	C	C	76	E	E	E
34	C	C	E	77	E	E	E
35	C	C	E	78	E	E	E
36	C	C	E	79	E	E	E
37	C	D	C	80	E	E	E
38	C	D	C	81	E	E	E
39	C	E	A	82	E	E	E
40	C	E	A	83	E	E	E
41	C	E	C	84	E	E	E
42	C	E	E	85	E	E	E
43	C	E	E				

注1 Aは“両国肯定”，Bは“母国肯定・ホスト国否定”，Cは“母国否定・ホスト国肯定”，Dは“両国否定”，Eは“その他”

海外勤務に対する期待や満足感などを、また、ホスト国に対する態度の説明理由として、ホスト国で自己の目的を達成させること、海外勤務に対する前向きな気持ちや満足感、ホスト国での生活に対する期待や満足感などを挙げた。

“両国否定群”の母国およびホスト国に対する態度の理由については、この群に属する対象者が非常に少数（3時期で延べ255名中5名）のため、分析を省略する。

3.4 態度類型とその変遷の個人的傾向

態度類型の個人内変容を表5に示した。個人別に検討した結果、時期を通して態度類型の変化がなかった者は22名（25.9%）だった。1名は“両国肯定群”に、5名は“母国肯定・ホスト国否定群”に、4名は“ホスト国肯定・母国否定群”に、12名は“その他群”に所属した。“その他群”の12名について、より詳細に検討した結果、3名は母国に対する態度の中群とホスト国に対する態度の中群に3時期を通して所属し、2名は母国に対する態度の中群とホスト国に対する態度の高群に3時期を通して所属しており、この5名には微細な変化も認められなかった。しかし、残りの7名は、母国あるいはホスト国に対する態度が微妙な変化（例えば、高群から中群への変化、中群から高群への変化）を示していた。すなわち、3時期を通して態度類型に全く変化がなかった者は15名（17.6%）であり、70名（82.4%）の態度類型は時期を通して何らかの変化が生じていることが確認できた。

4. 考察

4.1 母国およびホスト国に対する態度とその変遷

移住プロセスに着目し、海外勤務者の国に対する態度（行動意思）とその変遷、母国とホスト国に対する態度の組み合わせである態度類型とその変遷を検討した。

3時期の母国とホスト国に対する態度をそれぞれ時期間で比較した結果、両国に対する態度に有意な変化がみられた（表1）。母国に対する態度が出国前やホスト国滞在中よりも帰国後により肯定的に変化したのは、母国を離れた海外での滞在経験が母国の良さの再認識に結びついたと考えられる。また、ホスト国に対

する態度がホスト国滞在中に最も否定的であったのは、異文化への適応に直面することによるゆとりのなさがホスト国に対する態度を厳しくしたのかもしれない。

3時期の海外勤務者の態度類型は“その他群”が最も多かったものの、各態度類型に属する海外勤務者の比率に時期間での特徴的な変化が認められた（表2）。“ホスト国肯定・母国否定群”の比率は、出国前には24.7%であり、ホスト国滞在中にも23.5%と変わらず、帰国後には16.5%とやや減少している。これに対して、“母国肯定・ホスト国否定群”の比率は、出国前には18.8%であるが、ホスト国滞在中には34.1%に増加し、帰国後には一転して15.3%に減少している。また、“両国肯定群”の比率は、出国前とホスト国滞在中には9.4%と4.7%と低率であるが、帰国後は22.4%に増加している。ところが、“両国否定群”の比率は、出国前2.4%、ホスト国滞在中3.5%、帰国後0.0%と一貫して極めて低いかゼロである。このように、母国とホスト国に対する態度類型から海外勤務者の移住プロセスを分析した場合、時期によって各態度類型に属する者の比率が変化することが明らかとなった。

ところで、態度類型の個人内変容からも、多くの海外勤務者の国に対する態度が変化することが確認された（85名中63名で74.1%、表5）。しかし、“その他群”に関する詳細な分析から、微細な個人内態度変容を示した者が7名いることが分かり、何らかの個人内態度変容を示す者は70名（82.4%）に達することが改めて確認された。このように、小島・深田（2010, 2011）の留学生と帰国子女と同様に、海外勤務者の態度も出国前から帰国後までのプロセスを通して変化していることを実証した。

小島・深田（2010）は、母国を中心に、活躍する国際人にとって、母国およびホスト国に対する態度が重要であることを指摘しており、“両国肯定群”を最も望ましい群とも指摘している。そして、留学生が帰国後に“両国肯定群”に至るまでに、ホスト国肯定・母国否定の段階を経ることも示されている。しかし、帰国子女の場合は、必ずしもホスト国肯定・母国否定の段階を介さないことも示している（小島・深田2011）。本研究においても、帰国後に“両国肯定群”

であった19名の態度類型の個人内変容を確認したところ、滞在中では、1名が“両国肯定群”、10名が“母国肯定・ホスト国否定群”、2名が“ホスト国肯定・母国否定群”、6名が“その他群”であった。このように、海外勤務者の場合は、母国肯定・ホスト国否定の段階を経ることが多く、10名のうち6名は、出国前においても母国肯定・ホスト国否定を示していた。海外勤務者におけるこの異なる結果については、社会人と学生の違いや移住先や移住期間の違いなども考えられるが、解釈するのは難しい。一方で、留学生と同様に移住目的をもって移住する海外勤務者（母国肯定・ホスト国否定を経る）と、留学生（ホスト国肯定・母国否定を経る）の結果が大きく異なったことより、移住目的の有無は“両国肯定群”に至るまでの態度変容プロセスに影響していない可能性が大きいと推察される。

4.2 態度とその理由

小島・深田（2010, 2011）に倣い、海外勤務者の態度類型別に、態度の説明理由についても検討した（表3, 表4）。

母国に対する態度の説明理由として、“両国肯定群”と“母国肯定・ホスト国否定群”では、母国での生活に対する満足感、母国に対する肯定的感情などの母国に対する肯定的な理由が挙げられ、また、“ホスト国肯定・母国否定群”では、ホスト国での生活に対する期待や満足感、ホスト国で自己の目的を達成させるため、海外勤務に対する前向きな気持ち、海外勤務に対する満足感など、ホスト国や仕事に対する肯定的な理由が挙げられた。

ホスト国に対する態度の説明理由として、“両国肯定群”と“ホスト国肯定・母国否定群”では、ホスト国での生活に対する期待、ホスト国での生活に対する満足感、ホスト国に対する肯定的感情、ホスト国で自己の目的を達成させるため、海外勤務に対する前向きな気持ち、海外勤務に対する満足感など、ホスト国に対する肯定的な理由が挙げられ、また、“母国肯定・ホスト国否定群”では、ホスト国での生活に対する不安、ホスト国での生活に対する不満、母国に対する肯定的感情など、ホスト国に対する否定的な理由に加え、

母国に対する肯定的な理由が挙げられた。

全般的に、母国での生活に対する満足感や母国に対する肯定的感情が母国に対する肯定的態度（残りたい、帰りたい）の理由とみられ、ホスト国での生活に対する満足感やホスト国での自己の目的の達成がホスト国に対する肯定的態度（行きたい、残りたい）の理由とみられた。

さらに、海外勤務者、留学生、帰国子女の母国とホスト国に対する態度の理由を比較検討するため、最も多く挙げられた理由に着目した。具体的には、①母国に対する肯定的態度（残りたい、帰りたい）の理由分析には、3タイプの移住者の“両国肯定群”と“母国肯定・ホスト国否定群”のデータ（表6）を、②ホスト国に対する否定的態度（行きたくない、残りたくない）の理由分析には、“母国肯定・ホスト国否定群”と“両国否定群”のデータ（表7）を、③ホスト国に対する肯定的態度（行きたい、残りたい）の理由分析には“両国肯定群”と“ホスト国肯定・母国否定群”のデータ（表8）を、④母国に対する否定的態度（残りたくない、帰りたくない）の理由分析には、“ホスト国肯定・母国否定群”と“両国否定群”のデータ（表9）を使用した。

母国に対する肯定的態度（残りたい、帰りたい）の理由として、海外勤務者も留学生も帰国子女も、母国での生活に対する満足感、母国や母国民に対する肯定的感情を挙げていた。母国への肯定的態度と対比的なホスト国に対する否定的態度（行きたくない、残りたくない）の理由として、海外勤務者と帰国子女はホスト国での生活に対する不安、出国（渡航）に対する後向きな気持ちを挙げており、海外勤務者と留学生はホスト国での生活に対する不満を挙げていた。

これに対し、ホスト国に対する肯定的態度（行きたい、残りたい）の理由として、海外勤務者、留学生、帰国子女の多くは、ホスト国での自己の目的の達成（留学生においては、学習意欲（英語力など））を挙げていた。ホスト国への肯定的態度と対比的な母国に対する否定的態度（残りたくない、帰りたくない）の理由としても、移住者3タイプに共通して、ホスト国での自己の目的の達成（留学生においては、学習意欲（英語力など））が挙げられており、ホスト国での生活に

表6 母国に対する肯定的態度の理由

母国に対する態度 (残りたい, 帰りたい) の理由	出国前 (留学前)	滞在中 (留学中)	帰国後 (留学後)
海外勤務者 (両国肯定)	母国での生活に対する満足感 (2) ホスト国での生活に対する不安 (2)	—	母国での生活に対する満足感 (5)
海外勤務者 (母国肯定・ホスト国否定)	ホスト国での生活に対する不安 (5)	母国に対する肯定的感情 (7)	母国での生活に対する満足感 (3) 家族と一緒にいたかった (3)
留学生 (両国肯定)	母国民と離れる寂しさ (2)	母国民に対する肯定的感情 (6) : 留学中初期 母国民に対する肯定的感情 (6) : 留学中後期	母国に対する肯定的感情 (3)
留学生 (母国肯定・ホスト国否定)	—	母国での生活に対する満足感 (4) : 留学中初期 母国民に対する肯定的感情 (5) : 留学中後期	母国での生活に対する満足感 (4)
帰国子女 (両国肯定)	—	—	母国に対する肯定的感情 (5)
帰国子女 (母国肯定・ホスト国否定)	ホスト国での生活に対する不満 (7)	ホスト国での生活に対する不満 (2) 母国に対する肯定的感情 (2) 母国で自己の目的を達成させるため (2) 帰国に対する前向きな気持ち (2)	母国での生活に対する満足感 (4)

注1 : 括弧内の数値は人数

注2 : 留学生の結果は小島・深田 (2010) から, 帰国子女の結果は小島・深田 (2011) から抜粋

表7 ホスト国に対する否定的態度の理由

ホスト国に対する態度 (行きたくない, 残りたい) の理由	出国前 (留学前)	滞在中 (留学中)	帰国後 (留学後)
海外勤務者 (母国肯定・ホスト国否定)	ホスト国での生活に対する不安 (7)	ホスト国での生活に対する不満 (6)	出国に対する後向きな気持ち (勤務1) (3)
海外勤務者 (両国否定)	—	海外勤務に対する満足感 (2)	—
留学生 (母国肯定・ホスト国否定)	—	ホスト国での生活に対する不満 (4) : 留学中初期 帰国に対する前向きな気持ち (3) : 留学中後期	金銭の問題 (2)
留学生 (両国否定)	—	—	—
帰国子女 (母国肯定・ホスト国否定)	ホスト国での生活に対する不安 (8)	母国に対する肯定的感情 (4)	渡航に対する後向きな気持ち (2)
帰国子女 (両国否定)	—	—	—

注1 : 括弧内の数値は人数

注2 : 留学生の結果は小島・深田 (2010) から, 帰国子女の結果は小島・深田 (2011) から抜粋

表8 ホスト国に対する肯定的態度の理由

ホスト国に対する態度 (行きたい、残りたい) の理由	出国前 (留学前)	滞在中 (留学中)	帰国後 (留学後)
海外勤務者 (両国肯定)	ホスト国で自己の目的を達成させるため (仕事系1) (3)	—	出国に対する前向きな気持ち (旅行2) (4)
海外勤務者 (ホスト国肯定・母国否定)	ホスト国で自己の目的を達成させるため (仕事系4) (11)	ホスト国での生活に対する満足感 (8)	ホスト国での生活に対する満足感 (5)
留学生 (両国肯定)	—	学習意欲 (英語力など) (6) : 留学中初期 学習意欲 (英語力など) (6) : 留学中後期	ホスト国民に対する肯定的感情 (2) 学習意欲 (英語力など) (2)
留学生 (ホスト国肯定・母国否定)	学習意欲 (英語力など) (6)	学習意欲 (英語力など) (11) : 留学中初期 ホスト国での生活に対する満足感 (9) : 留学中後期	ホスト国での生活に対する満足感 (5)
帰国子女 (両国肯定)	ホスト国に対する肯定的感情 (2) ホスト国で自己の目的を達成させるため (2)	ホスト国民と離れる寂しさ (2)	渡航に対する前向きな気持ち (条件付) (4)
帰国子女 (ホスト国肯定・母国否定)	ホスト国で自己の目的を達成させるため (2) 渡航に対する前向きな気持ち (2) 母国在留に対する後向きな気持ち (2)	ホスト国での生活に対する満足感 (6)	ホスト国で自己の目的を達成させるため (3)

注1：括弧内の数値は人数

注2：留学生の結果は小島・深田 (2010) から、帰国子女の結果は小島・深田 (2011) から抜粋

表9 母国に対する否定的態度の理由

母国に対する態度 (残りたくない、帰りたくない) の理由	出国前 (留学前)	滞在中 (留学中)	帰国後 (留学後)
海外勤務者 (ホスト国肯定・母国否定)	ホスト国で自己の目的を達成させるため (仕事系1) (7)	ホスト国での生活に対する満足感 (6)	母国での生活に対する不満 (3) ホスト国で自己の目的を達成させるため (仕事系2) (3) 出国に対する前向きな気持ち (3)
海外勤務者 (両国否定)	—	—	—
留学生 (ホスト国肯定・母国否定)	学習意欲 (英語力など) (7)	学習意欲 (英語力など) (9) : 留学中初期 ホスト国での生活に対する満足感 (6) : 留学中後期	留学に対する前向きな気持ち (5)
留学生 (両国否定)	—	—	—
帰国子女 (ホスト国肯定・母国否定)	家族と一緒にいたかった (3)	ホスト国での生活に対する満足感 (4)	ホスト国で自己の目的を達成させるため (2) 母国での生活に対する不満 (2) 渡航に対する前向きな気持ち (2)
帰国子女 (両国否定)	—	—	—

注1：括弧内の数値は人数

注2：留学生の結果は小島・深田 (2010) から、帰国子女の結果は小島・深田 (2011) から抜粋

に対する満足感も理由として挙げられていた。

母国への帰国（残留）を促す際には、母国での生活に満足してもらうことや、母国や母国民に対する肯定的感情の重要性が、また海外への移住（派遣）を促す際には、移住（派遣）目的を持ってもらうことやホスト国での生活に満足してもらうことの重要性が確認できた。また、家族と一緒にいたかったことを、国に対する態度を規定する理由として海外勤務者と帰国子女は挙げており、家族の存在の大きさが示唆された。

4.3 まとめと今後の課題

移住プロセスを通して、海外勤務者の、母国とホスト国に対する態度および態度類型は変化することが確認された。また、生活に対する満足感が、母国とホスト国に対する態度の決定には重要な役割を担っていた。ホスト国に対する態度においては、海外勤務に対する満足感や自己の目的を達成させることへの思いも重要な役割を担っていた。

最後に、本研究では、海外勤務者の出国前から帰国後までのプロセスを追ったものであったが、回想法を用いた調査方法が用いられており、海外勤務者の“今”をリアルに捉えることができていたと言い難い。小島・深田（2011）が帰国子女研究についても指摘しているように、小島・深田（2010）が留学生を対象に実施した縦断的研究方法を用いることが望ましい。

参考文献

- Black, J. S., & Stephens, G. K. (1989) “The influence of the spouse on American expatriate adjustment and intent to stay in Pacific Rim overseas assignment”, *Journal of Management*, vol. 15, pp. 529-544.
- Herman, S. N., & Schild, E. (1960) “Contexts for the study of cross-cultural education”, *Journal of Social Psychology*, vol. 52, pp. 231-250.
- 小島奈々恵・深田博己（2010）「日本人短期留学生の母国とホスト国に対する態度変容とその影響要因」,『留学生教育』第15号, pp. 65-76.
- 小島奈々恵・深田博己（2011）「帰国子女の母国とホスト国に対する態度変容とその影響要因」,『広島大学大学院教育学研究科紀要第三部（教育人間科学関連領域）』第60号, pp. 195-203.
- 小島奈々恵・深田博己（2018）「海外勤務者の母国適応とホスト国適応—適応プロセスを追って—」,『東北大学高度教育・学生支援機構紀要』第4号, pp. 191-202.
- Martin, J. N. (1984) “The intercultural reentry: Conceptualization and directions for future research”, *Intercultural Journal of Intercultural Relations*, vol. 8, pp. 115-134.
- Rosenberg, M. J., & Hovland, C. I. (1960) “Cognitive, affective, and behavioral components of attitudes”, C. I. Hovland & M. I. Rosenberg eds., *Attitude organization and change: An analysis of consistency among attitude components*, New Haven, CT: Yale University Press, pp. 1-14.
- 斎藤耕二（1988）「帰国子女の適応と教育—異文化間心理学からのアプローチ—」,『社会心理学研究』第3号, pp. 12-19.
- Selmer, J. (2001) “Expatriate selection: Back to basics?”, *International Journal of Human Resource Management*, vol. 12, pp. 1219-1233.
- Selmer, J. (2004) “Psychological barriers to adjustment of Western business expatriates in China: Newcomers vs long stayers”, *International Journal of Human Resource Management*, vol. 15, pp. 794-813.
- Selmer, J. (2005) “Is bigger better? Size of the location and expatriate adjustment in China”, *International Journal of Human Resource Management*, vol. 16, pp. 1228-1242.
- Selmer, J. (2006) “Cultural novelty and adjustment: Western business expatriates in China”, *International Journal of Human Resource Management*, vol. 17, pp. 1209-1222.
- Takeuchi, R., Yun, S., & Russell, J. E. A. (2002) “Antecedents and consequences of the perceived adjustment of Japanese expatriates in the USA”, *International Journal of Human Resource Management*, vol. 13, pp. 1224-1244.
- Takeuchi, R., Yun, S., & Tesluk, P. E. (2002) “An examination of crossover and spillover effects of spousal and expatriate cross-cultural adjustment on expatriate outcomes”, *Journal of Applied Psychology*, vol. 87, pp. 655-666.

Wang, M., & Takeuchi, R. (2007) "The role of goal orientation during expatriation: A cross-sectional and longitudinal investigation", *Journal of Applied Psychology*, vol. 92, pp. 1437-1445.

